

# 野に仏・里に仏

大谷 眞

第三回目の旅・その二  
「遍路無料接待所」

1994年6月25日 晴

昨夜、クーラーのタイマーが切れてから、暑くて眠れなかった。蚊が一匹、部屋のどこかにいて、これがしつこくつきまとう。一応は修行中(?)の身とあっては、さすがに殺生がためらわれ、しかたなくそのままにしておいた。おかげでずいぶん刺されてしまった。まあ、死ぬわけでもないし、と自分を納得させる。

阿芸の町を過ぎてから、遍路道は自転車と歩行者だけのための専用道となった。車の騒音と排気ガスから逃れられただけでもありがたい。防波堤の横を抜け、時には家々の庭先を通り、トンネルをくぐっては、またこんもりとした木々の間や松林を抜ける。この10キロは本心に心地よい道だった。途中、電話ボックスを見つけ、「遍路無料接待所」へ予約の電話をした。お待ちしています、と女性の声がした。一体どのような方が運営されているのか楽しみだ。

昼近くなるにつれて、暑さは耐え難くなった。帽子をかぶり、後ろには手ぬぐいをぶら下げて歩く。頭を覆う分、中はむしろ、日差しには勝てない。こんなとき菅笠なら

通気も良いだろう。時代錯誤も甚だしいかぶり物、と最初に見合わせたことが今さらながら悔やまれた。ところで、頭には辛うじて帽子があるが、手と腕はどうしようもない。白衣からむき出しの部分に焼け、汗がしみてぴりぴりと痛む。仕方なくタオルを腕に巻きつけて歩いた。これとて、昔のように手っ甲をはめれば、随分ましになるだろう。昔の旅人の正装はそれなりの根拠があった訳だ。

赤岡町から道は海を離れ、北へ向かう。ここから1時間程でようやく第二十八番大日寺に着いた。二十七番からでは38キロあまりを歩いたことになる。お参りを済ませてから、少し山手に入った所の「爪彫薬師堂」にもお参りをした。横手に「名水」と表示があり、樋からどうと水が流れ落ちてようとするが、どうやらゴミが多そうだ。念のため手ぬぐいで濾して詰めた。再び本堂にもどり、裏手を拝借しお昼にした。何気なく汗を拭こうとし



て手ぬぐいを見ると、

こつてりと山土がついて  
いる。あれ?と思つて調  
べると、先程水を瀟した  
時に付いたものらしい。

しかたなくせつかく汲ん  
だ水を捨て、水道を借り  
て詰め替えさせてもらっ  
た。

大日寺を出てから広い  
道をまっすぐに進んでい  
ると、通りのむかいの軒  
先でこちらをうかがつて  
いた老人に呼び止められ  
た。

「おーい!あんた、どこへ  
行きなさる!」

「国分寺さんへ行こうと

思つてまゝす!」

「違う、違う、そつちじゃ  
ない!その手前を折れ  
て、川を越えんといかん  
よー!」

どうやら標識を見落とし  
て、まっすぐ来てしまっ  
たらしい。

「すみませーん!助かりま  
したー!」

と頭を下げると、

「うちは 顕正観音  
じゃー!」

と、笑いながら手を振つ  
てくれた。おそらくたび  
たび間違える人がいるの  
だろう。しかし、声をかけ  
られなかつたら、この炎

天下、延々と間違えたま  
ま行くところだった。

アユ釣りの姿を橋の上  
から眺めながら「戸板島  
橋」を渡った。橋を渡った  
所の小さな店で食料品の  
買い出しを済ませた。

「暑いやろー、お遍路さ  
ん。冷たいお茶、飲んでい  
かんか?」

店の奥さんがよく冷えた  
コップを手渡してくれた。  
一気に飲み干すと、ポツ  
トを手におかわりをうな  
がしてくれた。ありがた  
いが、飲みだしたら止ら  
なくなりそうだ。辞退し  
て礼を述べ、また歩き出

す。

「ここからビニールハウスの続く細い道を少し歩くと、農作業の建物らしい横手に、「遍路無料接待所」と書かれた建物を見つけた。各地でお世話になった道しるべに添えられていた、赤いペンキ絵のお遍路さんも描かれていた。敷地に入り、声をかけると、奥から青年が現れた。どうぞ自由にお使ください、と言われる。冷たいミルクも出していただき、恐縮しつつ一服していると、電話に出られたと思われるご婦人も帰って来られた。農作業の途中らしい。」

「すみません、いったいどのような方が、どのような趣旨で運営されているのかも知らず、厚かましくお邪魔しました。」

「今日はお山(石鎚山)に呼ばれていて主人はいませんから、そのへんの詳しいお話しはできませんけど、どうぞご自由に使ってください。」

とのこと。

「とりあえず本家のほうにシャワーがありますから、汗を流してください。」

奥さんに案内され、畑の間を抜けて、大きな農家に行く。おばあさんが一人、ニラの出荷の作業をしておられた。娘さんらしき人が出て来られ、シャワーの使い方を説明してくれた。遠慮なく汗を流すと、まさに生き返った。お礼を言っただけで家をあとし、接待所に戻ってからのいつの間にか眠ってしまった。急に疲れが出たらしい。

奥さんと息子さんは、夕方からハウスの消毒に行かれた。日中、ハウス内は極端に温度が上がり、とても作業どころではない、とのこと。都会に出荷する花の栽培をされておられるようだ。いそがしく作業されているのを見てみると、部屋でのんびりしているのが何とも心苦しい。といって、何かお手伝い出来るわけでもないのだが・・・。

8時をまわった頃、奥さんが帰ってこられた。夕食、今から作りますから、どうぞ一緒に、と言

われる。どうやらこの横手の建物で生活をされている様子だ。奥さんたちが本家に帰られるのなら、その後、適当に食事を済ませよう、と心積もりしていたので一瞬躊躇した。が、今さら断るのもかえって失礼な気がして、遠慮しつつ夕飯をいただくことにする。

台所がある奥の部屋にいくと、奥さんがザブザブとニラを洗っておられた。

「主人がお山にこもってる時は、わたしらも精進料理しか食べません。何もおもてなしできませんけど・・・。」

と恐縮されるので、こちらもますますうしろめたくなる。お接待していただけのほど、信心深くはない。あくまで「お遍路もどき」のバックパッカーに過ぎない。

夕食の準備のあと、奥さんは水ごりに行かれた。入れ違いに息子さんが戻られ、食卓の準備をされる。奥さんが戻られて食前の祈りとなり、私にも経本を渡された。ところがこれが全く歯が立たず、目で追うだけで詠むどころ



るではない。最後の「般若心経」だけ、つつかえつかえ参加した。

食事がすむと息子さんは本家に風呂をもらいに出了られた。

「主人がいたら、いろいろお話し相手になれたのでしようが・・・。」

と奥さんは言われ、それでも一年中忙しい花栽培の事や、家族の事など聞かせていただいた。ご主人は一年のほとんどをお山のお勤めで取られしまい、今や農業が趣味、と笑われた。息子さんは、花の学校で学んだ後は、稼業

に入ってくれて大助かり、結婚された娘さんも、今、本家のおじいさんが体が悪く、仕事帰りには立ち寄ってくれている、云々。家族全員が助け合って、しっかりと生きておられる様に心打たれた。どんなに苦境の中にあっても、最後のより所は、やはり家族の絆なのかもしれない。この施設の利用者も、この1年で100名にものぼる、とのこと。名簿に記入する際、目を通すと、外国人も含め、ほぼ全国からの利用者があった。うわさを聞いてやってく

る人も多いそうだ。立ち寄るだけの人達を含めれば、こうした無償の行為にどれだけの人達が助けられただろう。本当に頭が下がる思いがした。もっといろいろ聞きたいことばかりだが、お仕事がまだ残っている様子なので失礼することにした。

部屋の外の作業場には出荷準備の花が束ねられていた。

「いい匂いがしますよ。」奥さんが包みの一つを開いてくれた。クチナシのような甘い香りがした。「ちゃんとお接待できなく

て・・・。」

留守を守る主婦として、毅然とした話ぶりだった奥さんが、最後に恥じらうように微笑まれた。明朝は早立ちする予定ですから声をかけず失礼します、と礼を述べ、部屋に戻った。

3時半に目覚ましをセットし、寝袋に入った。外では遅くまで作業の音が聞こえていた。

6月26日 晴れ

目が覚めると外はうつすらと明るい。はて？3時半ならまだ暗いはずなのに・・・。枕元の時計を見ると4時45分。しまった！またやっちゃった！自分の寝返りで不用意に停止ボタンを押してしまつたらしい。あわてて白衣を着る。手当たり次第にザックにぶち込み、外へ飛び出した。掃除をすませてから出立するつもりだったのに、それどころではなくなつた。こんなぶざまなところを奥さんに見られたら、全く会わせる顔がない。そうでもなくても、所詮、私はただの「お遍路もどき」、素性はすで見通されてお

られるだろう。しかし、起きてからこんなに素早く行動したのは初めてだった。

外は日も昇らず、あたりはまだ眠っていた。シャツターが閉まつたままの作業場の奥で、みゃーっと猫の声が聞こえた。その方向に手を合わせて一礼し、すがすがしい朝の一步を踏み出した。涼しいうちに距離を稼ぐに限る。

5時半には太陽が顔を出し、すぐに汗が吹き出した。六時半過ぎ、第二十九番国分寺に到着。ひとけの無い境内でゆっくりとお参りを済ませ、ベンチを拝借し朝食を取った。ここで足のテーピングもすっかりと済ませる。七時に納経所が開くと同時に記帳をお願いした。この時間には、既に何人も参拜者が並んでいた。ただし徒歩での遍路は私だけだったようで、記帳が終わると、皆一様に慌ただしく車で次の霊場に向かわれた。

国分寺から次の第三十番善楽寺までは約7キロ。ただし三十番の札所はも

う一つある。安楽寺だ。この二つは長い間互いに自らが三十番札所として譲らず、争ってきた。かつて御本尊が寺の焼失によって移されたことに起因しているらしい。ただ、現在では善楽寺の方が正式に三十番札所として認められたとの旨、各寺の納経所に張り紙があつた。私も迷わず善楽寺に向かう。標識に従い、田んぼ道を抜けた。青々とした稲の匂いがむんむんとする。高知東道路の下をくぐり、人家を抜け、少し迷いながら川沿いの細い道に入った。日曜日なのに、中学生らしい生徒達の自転車と次々にすれ違つた。

「おはようございまーす！」  
道を譲つてやりすごすと、一様に挨拶をしてくれた。ここに限らず、四国の子供たちはほんとに礼儀正しい。

太陽は次第に強さを増し、じりじりと照りつけ始めた。六月と言うのに雨が少ないのは私にはありがたいが、これほどの暑さは予想だにしなかつた。水筒をザックの横に

取り付けるようになってから、水を口を含むことが多くなった。しかし、飲んでも飲んでみずぐにのどが渇く。上からの照りつけと、アスファルトの照り返しで、まさに地獄の釜を思わせる暑さだ。それでも木陰に入ると、すっと汗が引いていく。

日なたが暑ければ暑いほど、木陰の涼しさが極楽のように思えてしまう。

車の多い道に出ればらく行くと、道路脇の少し小高くなった所に休息所らしきものを見つけた。途中「良心市」とあった無

人販売所で買い求めたトマトを水で洗い、階段を上がった。ここから高知市内が見渡せた。すぐ下は墓地公園となっていて、海からの風が心地よく吹き上げている。小さなトマト七個、ペろりと平らげた。自分がどんどんシンブルになっていくのがわかる。

公園墓地を抜け、町に入るとすぐに山門があり、突き当たりには「一宮神社」、その右手に善楽寺があった。神様と仏様が仲良く同居されておられる感じだ。

お参りのあと、フェリー会社に電話をした。高知から夜9時発で大阪南港まで便があるとのこと。これを利用すれば、今夜の宿を確保する必要はなさそうだ。出発時刻を考えれば、ゆっくり歩いても今回は第三十三番雪渓寺までは打ち終えることが出来る。

善楽寺から第三十一番竹林寺へ向かう。二時間ほどの距離だ。周りほとんどんどん都会になっていく。照り返しの強い道を延々と歩く。道路脇に植えら



れた街路樹のわずかな木陰を見つけては一服した。暑さは堪え難く、自販機があるたびふらふらと吸い寄せられる。水分もさることながら、体をとにかく冷やしたい一心でつい買い求めるが、汗はまたすぐに吹き出し、口にはべたべたした感触だけが残った。

広い河川の堤防にそって歩き、大きな橋のあたりから竹林寺への登りとなった。途中から山道に入る。日曜日とあってハイキングを楽しむ人でにぎわっていた。この道は本堂の裏手に出た。広い境内には家族連れの様も見える。俳句の会なのか、小さなノート片手に一句ひねっているグループもいた。

お参りを済ませ、来た方向とは反対から石段を下る。駐車場を過ぎてさらにまた下る。体が汗臭いからか蚊がまとわりついて離れない。出来れば殺したくないので、手ぬぐいを振り回しながら駆け降りた。道はまた河に突き当たり、これを左手に進む。かなり歩いたところで第三十二番禅師峯

寺の参道に出た。車道の横の山道を行くが、ここでも下草が生い茂り、クモの巣を何度も顔で突き破った。ほうほうのていで登りきると、道の終わりにロープが張られ、進入禁止になっていた。とつくにうち捨てられた道を登ってきたようだ。本堂と大師堂は山の頂にあつた。さほど広くはない境内から、はるか高知市内と海が展望できた。吹き上げる風が心地よい。下りは車道を歩いた。

昨日に続き、白衣の袖から出る腕が、日焼けでヒリヒリと痛んだ。袖を降ろすと暑いし、上げると日に焼けるし、まったくやり切れない。背中のザックも、汗をふくんで臭い始めていた。

余談になるが自分の汗臭さに閉口したのは初めてだった。過去、汗をかけたあと、妻に注意されたことはあつたが、この遍路では、毎日今まで以上に大量の汗をかいている。これが蒸発し凝縮することで、雑菌が繁殖しやすくなるのだろう。シャツは吸湿性の良い新素材のTシャツを使用し、毎日

こまめに洗濯していたが、おそらくザックの汚れが雑菌の汚染源になっているのかも知れない。いずれにせよ、あまり人に近づかないほうがよさそうだ。

ところで、今日の行程で、問題が一つあつた。次の第三十三番雪蹊寺まで行くには、途中、浦戸湾を渡らねばならない。湾にかかる浦戸大橋を利用して約10キロ、ところが、渡し舟を利用すると2キロほど行程が短縮できる。本来、全部歩いて回る事を趣旨とするなら、浦戸大橋を渡るべきかも知れない。ただ、浦戸大橋ができる以前は、この区間は古来、舟を利用したと聞く。この方がむしろ過去の足跡をたどる意味では私の趣旨にそうもの、そう都合よく解釈をして、渡し舟を利用することにした。

ところで雪蹊寺まで8キロ足らずとしたら、禅師峯寺を出たのが3時、うまく行けばギリギリ納経所の開いている時間に間に合うかも知れない、そう思うとつい足が速くなった。できれば雪蹊寺

を打ち終えて、今回は終わりたかった。

渡し舟の発着場に着くと、まさに船が出るころだった。500mほどの距離で湾を横切り、後は真つすぐ、雪隠寺まで民家と商店街の間を抜ける。

5時をわずかにまわったところでよう

やく到着した。境内には既に人影はない。ああ、間に合わなかった、と肩を落としていると、後ろで声があった。

「納経ですか？」

振り向くと、ご住職らしき人が立たれていた。

「すみません、5時をまわってしまっただんですが

よろしいでしょうか？」  
「いいですよ、どうぞどうぞ。」

勧められるままに納経所に入り、記帳を先にお願います。

「歩いてお回りですか？」  
納経帳に墨でしたためながら、話しかけられた。

「はい。」

「私も以前、夏に100日

ほどかけてお四国を回らせていただきました。」

その時の印象として、四国全土にわたり随分木が少なくなっただけ、木を切ることで環境はどんどん悪くなること、人間は愚かにも自然と共存すること、等を忘れてしまっていること、等々、熱心に語ら

案外お歳をめされているのだろうか？しかしどう見ても六十歳代にしか見えなかった。

記帳のお礼を述べて納経所を出た。後はゆっくりとお参りをすませた。終わってから白衣を脱ぎ、ていねいにたたみ、ずだ袋と一緒にザックに収め



れた。

「ところで、足の具合はどうですか？」

「最初はまめに苦しめられました。最初が苦しみながらも、テープの利用や、中敷を換えたことでずいぶん楽になりました。」

「昔、軍隊では靴に足をあわせたんですよ。」

「軍隊経験があるとすれば、

た。今回はここで打ち止めとする。

境内を出て、不思議な安らぎと懐かしさが入り交じった夕刻の町を抜け、バス停に向った。日中の暑さも、ようやくやわらぎ始めていた。